

平成 31 年1月 10 日 市長定例記者会見 会見録

【司会】

それでは、ただいまから、市長定例記者会見を開催いたします。

本日の話題は1件です。

それでは市長、よろしく願いいたします。

【市長】

明けましておめでとうございます。

年末年始、どうお過ごしでしょうか。リフレッシュできましたでしょうか。本年もどうぞよろしく願いいたします。

お気づきの方も、いらっしゃるかと思いますが、今日からライブ配信でございますので、大げさなことを言うと、この記者会見のやり取りは、世界に発信をできる、ということになりますので、私も今日、ちょっと身だしなみを整えてまいりました。あまり意識しちゃうとオープンにならないと思うので、今までとおりの気持ちで、なるべく率直に、お伝えをしたいなというふうに思いますが、ぜひそんな意識を持っていただければうれしいな、とそんなふうに思います。

それでは、今日は話題、1つに絞りました。

「駿河東海道おんぱく 2019」を開催します、ということであります。

この「東海道おんぱく」、まだまだ認知度が低いです。ただとつても、中身を確認してもらおうと、官民連携の面白い企画が目白押しであります。ここのところを今回、もっともっと打ち出していきたいなと思っております。

2月2日の土曜日から3月 24 日の日曜日までの 51 日間。新しい静岡を五感で楽しんで頂ける、官民連携のイベントで、私どもの観光政策の一つの目玉であります。

最初ネーミングを「おんぱく」と、するというとき、議論があったんですよ。「おんぱく」は元々は大分県の別府市で始まった「温泉泊覧会」のことを、略して「おんぱく」って言っていたんです。ですから、「おんぱく」の「おん」、温泉の「温」だし、博覧会の「はく」は「泊まる」という字ね。「おんぱく」と言っていたわけですね。ちょっとそのイメージに引きずられるのはよくないなと。その温泉の泊覧会なのかというふうに誤解されるのは嫌だな、というふうに思って、他のネーミングでもいいんじゃない？という議論もあったんです。私はどちらかという、そっちの方だったんですね。でも、「おんぱく」というのは、「カラオケ」みたいなもので、ひとつ地域資源を生かしたイベントとして定着していますよと。だから、例えば、「よさこい」が、高知のダンスであっても、いろんなところで、今、全国で「よさこい」が踊られているのと同じように、「東海道のおんぱく」があってもいいんじゃないか、という議論に落ち着いて、「おんぱく」というふうにネーミングをして展開をしております。

理屈を言うと、その温泉の「おん」ではなくて、「故きを温め新しきを知る」という意味での「おん」だと。温めると。故きを温めると。つまり、ないものねだりをするんじゃないで、あるもの探しをしようというのが、静岡市の今の観光政策の理念なんです。

そうすると、古くから先人が残してくれた、あるいは自然が残してくれた、静岡の観光資源を探して民間の皆さんと一緒にそれに光を当てて、一つの企画、一つのイベント、一つの事業として、プロデュースすることによって体験をしてもらおうと。

「モノ思考」から、「コト思考」という観光のトレンドが変わっているわけだから、その「コト思考」ということに焦点を合わせて、小さな一つ一つの取り組みに集積して、一挙にこういう形でプロモーションしていこうということでもあります。

さて、プログラム参加申し込みの受付開始につきましては、すでにお知らせしたところですが、本日は「2019年おんぱく」の見所やおすすめポイントを紹介したいと思います。

専門家といろいろ議論をしたんですね。そうすると、不特定多数ではなくて、1回1回ごとの「おんぱく」の来てもらいたターゲットを絞った方が集客力もあるし、また長続きもするというアドバイスももらいまして、今回のメインターゲットは20代から40代の女性を対象にしています。ターゲットにしています。

まさに、皆さん、女性記者の皆さんは、そのターゲットにあたるわけですので、ぜひ、この58のプログラム、もし関心があるものがあったら、オフの日に出かけて行ってもらえれば、大変嬉しいなと思いますけれども。20代からの40代の女性は、自分が良いものと納得するものには、十分お金をかけます。また、その良いものを魅力的に多くの人に伝えるSNSであるとか、発信力を持っている方々です。

前回の39プログラムから今回は58プログラムと、プログラムの充実・増加を図るとともにプロモーションの方法を工夫して、20代から40代の女性に絶大な訴求力を誇るフリーペーパー「womo」の1月号、これを借り切りまして、29ページからドーンと特集を組んでもらっております。

正式な市が作った「おんぱく」のパンフレットは、こういうやつがあるんですけども、これと同等の内容、紙面を割いたやつをこの「womo」、女性が行きそうな、美容室とかスーパーとか、そういうところに置いてあるのはみなさんご存知だと思いますけども、そこに置かしてもらいPRをしているところでもあります。

さて、私が説明するよりも、今日は当事者に年始の忙しいところ、記者会見のためにいらっしやっただきまして、そして、その魅力というものをお伝えした方が理解をしていただけるかなと思って、ゲストをお呼びしております。

静岡といえば、お茶。プログラムの3、4、8、34、36、51と58の中でもお茶に関連した事業、プログラムというのは、結構あるわけですね。

それから、今年は、ラグビーワールドカップイヤーですし、オリンピックイヤーであるし、スポーツを通じたまちづくりというの、静岡が力を入れているところですので、スポーツ関連のプログラムもNo.12、13、25、26、49と5つのプログラムを揃えています。なので、お茶とスポーツということで、20代から40代の女性にぜひ体験をしていただきたいという仕立てでもあります。単に何かを見るとか、

食べるだけではなくて、それぞれのプログラムの主催をする皆さんの民間ならではの柔軟なアイデアで、静岡の魅力を提供し、そして、お客さんに体験いただけるプログラムを数多く用意しております。ここまで申し上げましたところで、お待たせをいたしました。本日は、皆さんにプログラムのひとつを実際に体験していただくために、第1回目からプログラムを鋭意提供していただいている清水区興津にある『和カフェ 茶楽』の山梨さんに、お越しをいただきましたので、これからプレゼンテーションをさせていただきたいと思っております。ぜひ拍手をもってお迎えをください。

(拍手)

どうもありがとうございます。

【茶楽(ちゃらく)・山梨氏】

ご紹介に預かりました清水区興津の茶問屋「茶楽」山梨商店と申します。本日は、貴重なお時間をいただきましてありがとうございます。よろしくお願ひいたします。本日は弊社の「おんぱく」での取り組み、また、「おんぱく」を経た現在の弊社の取り組みを併せてご紹介させていただければと思います。ご紹介いただいたように、初年度の「おんぱく 2017」から参加をしております。今回で3回目の参加で、初年度は、闘茶&カフェという利き茶クイズ、それから、昨年度は、静岡県産の産地別静岡茶飲み比べ&ランチで、本年度は静岡お茶名人のお茶飲み比べ&カフェというタイトル。お手元のパンフレットの8番でプログラム提供させていただいております。今、お配りしておりますのは、今回5種類のお茶を飲み比べしていただく体験の内の2種類をお持ちしております。赤いシールの付いた方が、静岡のとあるお茶名人のみが作っておりますマスカットのような香りのする「香寿」という品種のお茶でございます。

そして、シールのない方ですね。こちらは、静岡のお茶名人の1人森内さんという方が、作っております「烏龍茶」です。後ほど、お茶についてはご紹介させていただきます。また、飲み比べ後に、召し上がっていただくようなスイーツも一口ではありますが、本日、ご用意させていただきましたので、よろしければお召し上がりになりながらお話を聴いていただけたらと思います。

弊社はですね、本業は製茶問屋なんですけども、その傍らで「和カフェ」、最近流行りの「お茶カフェ」をやっております。元々、お茶の入れ方教室ですとか、そういう体験型教室というのをやりたいなという思いはあったんですけども、実際にどうやってお客様を集客するための告知をするのか、どういう内容を作るのか、また、どういう価格設定でプログラムを作っていくのか、ということに関しては、何となくやりたいことは、あるんだけども、どうやっていいかわからないという、ノウハウがない状態が「おんぱく2017」前でした。「おんぱく2017」に参加をさせていただきまして、その取り組みの中で、非常にご担当の方と一緒にどういう内容の教室をやるのか、それはどういう形で集客のための訴求をしていくのか。写真であったりですとか、謳い方をどういうふうにするか、また、どういう価格設定をしていくのか、本当にプログラムを作るという詳細内容に関しまして、細かくご担当の方と打合せをさせていただいて、弊社としては、まったくノウハウのないところからのスタートでしたので、一気に全てのノウハウを蓄積することができる非常に貴重な経験となりました。また、「おんぱく」では、参加者の弊社以外の事業者さんも多いものですから、静岡の中でどういうプログラムをやるのがい

いのかというのが私たちとしても、1つ参考になったところございました。

もう1つですね、我々が「おんぱく」で非常に勉強させていただいたこととしては、今までの大人数バス1台を借り切って50人くらいで来てやる観光体験と違いまして、「おんぱく」は本当に、うちなんかに関していえば、2人から催行します。最大でも12人、14人くらいでやりますというところで、バス1台できてしまうと、こちらの受け入れる側も20人、人を用意して、2時間用意をして、イベントのための用意というのが大変な運営になるんですけども、「おんぱく」はコンパクトな観光体験ということで、2人もしくは12人というところでしたので、うちに関していえば、私1人で準備から当日の催行まで行うことができる、ということで、人員面での負担も少なくできるプログラムっていうのは、我々でも出来るんだなということが、実感できたことが大きな価値がありました。

また、実際に私たちの場合はですね、イベントを行うということが本当のゴールではなくてですね、イベントをきっかけにお客様とコミュニケーションを取らせていただいて、うちのお茶を買っていただくということが、お茶屋としての本当の目的でありますので、これから何度も観光事業として、続けていくっていうところを考えると、やっていく負担が少ない形でも、いろいろ教室ですとか、こういうプログラムっていうのが作れるんだなと発見があったことが非常に大きな収穫でございました。

現在ではですね、こういった「おんぱく」の取り組みを通じて、弊社では季節がわりにお茶の体験教室というのをやっております。例えば、新茶の時期には新茶の飲み比べ、それから夏休み、お子様と一緒にお茶を使ったアレンジティーを作る教室ですとか、2、3ヶ月の周期で、いろんな教室をやって、現在では、年間で約600人の集客がある、弊社としては非常に大きな事業の1つとなることが出来ました。「おんぱく」には、お試していろいろとやらしていただける、且つ、専門家の方から貴重なご意見をいただけるということで、私たちとしては、非常に価値のある取り組みをさせていただくと感じております。

今回の本年度のご紹介を簡単にさせていただきますと、今日、お手元にごございます2種のお茶と、実際には5種類お茶を飲み見比べていただいて、そのお茶っていうのも、普通のお茶ではなくてですね、静岡県内のお茶名人といわれる方々、それこそ農林水産大臣賞なんかを受賞されている方々のお茶ですとか、少し今日、ちょっと変わり種のお茶をご用意させていただいたんですけども、マスカットのような香りのする品種のほうじ茶ですとか、「え、何それ」という、お茶離れが進んだ今ですので、逆に色々なことに挑戦を、お茶名人といわれる方でも非常にいろいろな取組みをチャレンジをされております。

今回は、そういったお茶をいろいろと5種類ご紹介させていただいて、集客という面でお茶だけだとちょっと弱いのかなというところもありまして、お茶を召し上がっていただいた後に、カフェでスイーツと一緒にお茶を楽しんでくださいというようなプログラム内容になっております。詳細につきましては、本日、資料をお持ちしておりますので、よろしければ後ほどお問合せいただければと思います。以上で終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

【市長】

山梨さん、どうもありがとうございました。今、質問受けていいかな。

【司会】

案件に関するご質問であれば。

【市長】

いいの？飲み比べをしてもらわなくてもいいのかな。

【茶楽】

お配りしてあるので、大丈夫です。ありがとうございます。

【市長】

ぜひ堪能してみてください。できれば、ちょっと山梨さん、残っててもらって、個別取材に応じてもらえればと思いますのでよろしくお願ひします。どうもありがとうございました。

今回の「おんぱく」はね、新しい試みなんですけれども、山梨さんのように将来ビジネスとしてやっていきたいと、つまり、これを自分のお店の販売に伝えたいというような想を持っている、そんな方々を商品開発コース、つまり、旅行商品として、観光商品としてインキュベートしていくんだと、行政は、というようなプログラムと、いや、儲からなくていいよと。自分たちボランティアとしてあるいは任意団体として好きなことをやっているからそれを多くの人に紹介をしたいんですと、それで人が集まってくればそれで御の字なんだという方々のプログラムも入っています。それを、地域活性化コースというふうに、いちおう、行政的にはカテゴライズしてあるんですけれども、どのプログラムがどっちのコースだというのはあえて書いてはないんですけれども、できれば、そんな形で裾野を広くしてプログラムを多種多様に揃えていきたいなと思っております。

実際問題、プログラム数は今回3回目ですけれども、伸びているんですね。確か一回目は 30 個ぐらいだったと思うんですけれども、2017 年最初にやった時には…、最初は結構多かったんだな。60 プログラムだったんだね。で、前回 2 回目が 37 プログラム。今回が、58 プログラムということですので。ぜひ、取材方をよろしくお願ひします。

また、この期間に3年越しにMICEの推進の立場から全国大会を誘致してあります。2月 15 日、16 日に開催をいたしますけれども、街道観光をテーマにした「全国街道交流会議第 12 回全国大会 in 静岡」、これを誘致・開催をすることにしておりますので、全国から街道観光に関心のある方が何百人と集まります。その方々にも、今、こんな「おんぱく」をやっているということをPRしていきたいなというふうに思っています。

いずれにいたしましても、東海道という日本の大動脈のど真ん中である静岡市ならではの街道文化・街道観光を推進し、この「おんぱくプログラム」もますます充実することによって交流人口の拡大を目指していきたいと考えております。以上です。

【司会】

それでは、ただ今の発表項目につきまして、質問がある方はお願ひしたいと思いますが、ご質問の際は社名とお名前をおっしゃってからお願ひしたいと思ひます。いかがでしょうか。

【市長】

質問が欲しいところなんだけどな。

【司会】

よろしいですか。ありがとうございました。それでは、幹事社質問に移りたいと思いますので、幹事社さんよろしく願いいたします。

【時事通信】

幹事社の時事通信社です。質問は2点あります。いろいろなところでお話されているかもしれないんですけども、新年を迎えて市長が今年、最重要課題として考える分野は何ですか。

あと、もう一つは駿河湾フェリーの運営についてで、県は3市3町とともに一般社団法人を設立し運営していくと発表しましたが、市は利用促進に向け具体的にどのように関わっていくかをお聞かせください。よろしく願いします。

【市長】

はい、ありがとうございます。大きく2つ質問をいただきました。まず前者の質問、最重要課題ということですけども、政策以前の問題で、私自身に課している最終課題は、自らの情報発信力の強化であります。まず私が市長として先頭になって、やはり今の静岡市がどんな都市を目指しているのか。例えば2030年を、SDGsをね、意識して目指すべき都市ビジョンをもっと直接市民の皆さんに語るなければいけないし、あるいは喫緊の市民の皆さんから期待の高い、あるいはニーズの高い子育て支援であるとか、防災対策だとか、それについても市の職員一生懸命にやってくれていますので、それを私がこういうことをやっているんだということをわかりやすく説明する。報道機関の皆さんにも、大変お世話になっているんですけどもね、やっぱり年末年始いろんな地域の会合、公務の拘束を離れて、私の従来からの地元であるとかね、昔ながらのいろいろな所に顔を出していくとね、伝わっているようで伝わってないですね。

正確な情報が理解されているようで、理解されていないわけですよ。私とすると、中長期的な私の求める都市ビジョンを伝えていって、ああ、それならいいねと言ってもらいたいし、あるいは身近に生活目線で市民の皆さんに関心のある、そんな政策分野のことについても私自身がちゃんと説明をしなければいけないなというふうに思っています。

二つ目の駿河湾フェリーの運営。これについて、積極的に静岡市はコミットメントしていきたいというふうに思っています。このフェリー事業は、地域に観光政策としてね、経済効果をもたらす、そんな社会的インフラだというふうにも思っていますし、また伊豆市の菊地市長をはじめ、伊豆半島の自治体の皆さんと考えると、これが、例えば政令指定都市・静岡への直接の交通網ですのでね、防災の時のライフライン、あるいは病院に行く時の緊急搬送のラインとしても使えると。生活インフラとしても使えると。そういった意味でも、公共がこれを支えていくという必要性はあるだろうというふうに理解しております。

いずれにしても、年間利用者数 20 万人の目標達成に向け、本市として責任をもって対応をしていきたいと思っておりますし、協議会、どういう組織形態になるか知れませんが、市の職員を一人派遣をしようというふうにも総務局と準備をしているところであります。以上です。

【司会】

はい、それでは、各社さんからのご質問を受けたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。どうでしょう？ はい、SBSさん、どうぞ。

【静岡放送(SBS)】

昨日、連合静岡の賀詞交歓会がありまして、そこでの川勝知事の発言なんですが『白糸の滝のトイレが美術館みたいになっているでしょう。あれは須藤市長がなさいましたね。そういう一方で、三保松原が世界遺産になったのに、そこにですね、くっさい、臭い便所がある。そこに博物館みたいなものを仮小屋で作ってね、そういう人もいます』と、まるで市長選を意識して田辺市長を批判したかのように私には聞こえたんですが、市長はこうした知事の発言をどのようにお感じでしょうか。

【市長】

知事さんが、昨日、そんなことをおっしゃったんですか。そうですか。

川勝知事から、2013 年に世界遺産に登録された直後からそんなご指摘はいただいております。なので、改善しなければいけないなと思って、リニューアルをしたわけでありまして。既存のトイレも、それまで和式だったものですからね、それを洋式トイレにしましたし、またウォシュレットを付けましたし、リニューアルを 2014 年、登録を受けた翌年には完成をさせていただき、その臭さというのはいづいぶん改善できたというふうに思っております。

ただ、それは暫定的なリニューアルであり、本格的にやっぱりきれいなトイレを提供するというのも大事なので、ご存じのとおり、今年の春オープンするビジターセンターですね、ビジターセンターの中において、ビジターセンターって言っちゃいけないんだ、三保松原文化創造センター。今まで仮称として、ビジターセンターって言っていましたが、本格的にはこの春から三保松原文化創造センター、ビジターセンターの機能は持っているわけですけどね。文化創造センターの中におけるトイレを 24 時間 365 日開放します。つまり、センターは閉館の時にも、トイレは自由に出入りできるような、そんなオペレーション、設計にしておりますので、今の既存のやつは今月中に撤去をして、そちらの方を利用してもらって、それはもうピカピカのトイレでありますのでね、知事さんがご心配いただいたことは、大変ありがたく受け止めますけれども、大丈夫ですということをお伝えいただきたいと思っております。

【静岡放送】

選挙も近いこのタイミングで、ああいう場で、なぜそんな発言が出たとお感じでしょうか。

【市長】

そうですね。

【静岡放送】

わかりました。

【市長】

県市の連携、大事だと思っています。

先ほどの話の続きですけどもね、駿河湾フェリーをやっぴり県市連携でこれから支えていくということを、私は大事にしたいなというふうに思いますし、この前、商工会議所の賀詞交(換会)の時にも経済人の皆さんにも申し上げましたし、正月に入って夢テラス、うれしい悲鳴ですけども、たくさんの方々が市内外から訪れて来ています。

これも、静岡市と静岡県がね、手を携えて同じビジョンのもとに、こんな観光拠点を整備しようという共同作業を続ければ、あんな素晴らしいワールドスタンダードのね、展望が楽しめる拠点が作れるんだと。だから、政令市と言えども、静岡県と協力し合ってやる事業たくさんあるかと思いたいのですね、そんなことで今年もね、取り組んでいきたいなというふうに思っています。

【司会】

はい、SATV(静岡朝日テレビ)さん、どうぞ。

【静岡朝日テレビ】

今、お話がありました日本平の話なんですけども、ここにカジノをという話がまたぞろでできましたけれども、これについての所感を伺いたいんですが。

【市長】

私は日本平に、カジノは似合わないというふうに思っています。

あの富士山の眺望というものを所与の素晴らしい資源というふうに受け止めたのちに、子どもも大人も楽しめるような、そんな場所にこれから官民連携でやっていきたいなというふうに夢を描いています。

【司会】

はい、読売(新聞)さん、どうぞ。

【読売新聞】

さきほど、県と市の連携が重要だというお話がありましたので、お伺いをしたいんですけども、4月の市長選に向けて、最近、川勝知事は二重行政の解消が必要だという発言を繰り返されています

が、二重行政解消について田辺市長はどのようにお考えでしょうか。

【市長】

実務的には今、市の職員と県の職員、きっちり歯車を合わせてやっておりますので、大阪府と大阪市のような二重行政はないというふうに、私は理解しています。

ただ、トップ同士の関係をもっともっと胸襟を開きたい関係にしていかなければいけないということは、昨年に引き続き、私も自戒をしておりますのでね、とにかく前向きに、お互いのいいところを尊重しながらね、県知事と向き合っていきたいなというふうに思っています。

【司会】

はい、他にいかがでしょうか。はい、朝日新聞さん、どうぞ。

【朝日新聞】

それに関連して、4月に選挙がありますから、あれなんですけど、G3、浜松、知事、田辺さんと鈴木さんと三者会談っていうのが、ずっと開かれていないんですけど、今のところ、今後の見通しはいかがでしょうか。

【市長】

そうですね、三者共通の課題で開くということも、今年は視野に入れたいなと思っています。

【朝日新聞】

選挙後ですか。

【市長】

なかなか私のスケジュールもタイトになっているようですのでね。

【司会】

他にいかがでしょうか。はい、読売(新聞)さん、もう一度どうぞ。

【読売新聞】

静岡市で回収しているペットボトルの回収量が他の政令市に比べて4分の1以下に留まっている問題についてお伺いします。

前回の会見で、田辺市長はその問題について解決に向けて努力しなければならないとお話して、廃プラスチック削減についてできる取組を、環境局に指示しているとお話されました。その後、回収業務の見直しですとか、市民への啓発のやり方の見直しについてどのようにお考えでしょうか。

【市長】

このペットボトルのことについて、問題意識をもって取材活動をしてくださっていること、私も記事を読ませていただきまして、敬意を表したいなと思います。SDGを標榜する中で、プラスチックごみの問題をどうするかということは、大切な課題であります。その一環として、ペットボトルの問題というのもあるかと思いますが、その課題については前回も、私、言及をしたとおりであります。

しかし、ご指摘を受けてペットボトルの排出方法のより一層の市民への周知を図り、回収量の増加につなげていきたいなと思います。

具体的には、4月から、スマホ用のごみ分別アプリの供用開始を計画しております。（「ごみの出し方便利帳」提示）これ、記者ご覧になったことはありますか。静岡市のごみの出し方分別ガイドブック。広報しずおかと一緒に全世帯に配っているものなんですけども、でも、これ、かさばるし、あるいは失くしちゃったら、どこへいったのってなるし。ではなくて、ずっと、いつでも閲覧可能にするために、この分量と同じコンテンツの入った内容のアプリを、今、準備をしていますので、必要に応じてスマホを操作してね、静岡市はこんなふうな出し方をしているという情報にすぐアクセスできるような、こんなことを新たな取り組みとして、今回の記事がきっかけですよ。こういうことを環境局の若手職員を中心に発案してくれたので、「よし！やろう！」というように、今、準備をしております。あるいは、引き続き全世帯に啓発のチラシを配付したり、あるいは、必要に応じて自治会への出前講座に臨んだり、あるいは、廃棄物減量等推進員という方々がいらっしゃいますので、その方々を通じて、より一層の周知を図っていきたいと思っています。

【読売新聞】

ありがとうございます。周知徹底を図るという今の方針については、承知しました。

それとは別にですね、現在、回収方法について、葵区・駿河区では、ごみ集積所（ステーション）などで回収しない拠点回収、清水区では月1回の集積所回収という方法をとっていますが、今回、弊紙の報道が出る前からですね、インターネット上では、びん・缶が月1回、ペットボトルは回収自体がない、これは葵区・駿河区だと思えますけど、そういうような市の収集方法に疑問を呈するような声ですとか、家に溜まるのが嫌だからもっと集めに来て欲しいよなどといった声が散見されますけれども、このような市民の声には、どのように対応されていくでしょうか。

【市長】

今、ご指摘のとおり、一国二制度ですね。このことの解消方法については、旧静岡市と旧清水市では違う、清水には集積所が用意されているという現状ですけれども、私の施政方針の一丁目一番地は官民連携であります。民間の力を利用して、このことを一つ、回収量の増加につなげていこうという中で、旧静岡市では、スーパーさんを中心に協力していただいて、“拠点方式”と言っておりますけれども、その回収量の増加に貢献をしていただいております。

この頃は、一つのスーパーのサービスとして評判なんでしょうね、ロコミで。清水区内のスーパーもね、うちもやるよ、というような流れも出てきております。そういう中ではね、費用対効果を考えて、私

私たちは当面この方法を維持していきたいというふうに思っています。今後の回収情報や回収されたペットボトルの再商品化の状況などを注視しつつ、費用対効果などを踏まえ、静岡型の効率的なリサイクル体制を整備してまいります。以上です。

【読売新聞】

ありがとうございます。拠点回収をしばらくは継続して、回収状況を見守っていくというお考えということなんですけれども、現在、静岡市の方では民間の協力店舗の回収率について、正確に把握できていない状況ですが、これについては調査などのご意向はあるのでしょうか。

【市長】

民間のなんですか。

【読売新聞】

静岡市が回収しているスーパーでの回収量は、市の方で把握できていると思うんですけれども、それ以外の民間の協力していただいているスーパー、市内 45 店舗か 60 店舗くらいあると思うんですけれども、その回収量は市の方では把握していないというふうに取り材に対してはお答えいただけますが……。

【市長】

把握できていると私は聞いておりますよ。そして、その回収量も年々上がっているというふうに聞いております。

【読売新聞】

では、担当局に聞いてみます。

【ごみ減量推進課長】

民間の方のしずてつストアさんとかが回収してくれているんですけれども、一部の所のデータはいただいているんですけれども、全体の量については把握できていないものですから、今後、全部の回収しているスーパーさん、店舗さんの方に照会をして調査の方をしていきたいと考えております。以上でございます。

【市長】

本来ね、再商品化率って、先ほど申し上げましたけれども。ご存知かもしれませんが、SDGs の理念の中からは、これが永久にリサイクルされなければならない訳ですね。そういう点で、缶とかびんに比べると、ペットボトルのリサイクル率って 20%位なんです。ペットボトルがペットボトルに、“PET to PET”って言いますが、それが 20%位で、あとはフリースみたいな衣類になっ

たりと、そこで終わりなんですね、その先がないわけなんですね。そういう意味でもね、全体的に、大局的に、この問題を考えていかなきゃならないという認識を持っていることも、是非、指摘しておきたいと思いますので。全体のことについてね、ペットボトルも大事ですけれどもね。是非、意識を持っていただけると嬉しいなというふうに思います。以上です。

【司会】

いかがでしょうか。NHK(日本放送)さん、どうぞ。

【日本放送】

子育て支援の方にも力を入れていきたいということでしたけれども、子ども医療費をめぐることに關して、来年度中に目指していくということでしたけれども、その後、どうでしょうか、お考えは。

【市長】

全くそのとおりです。浜松市ときちつと同じ姿勢で連携を深めながら、県にご理解をいただきたいなと思います。

【日本放送】

年末に協議があつて、これまで恒久的に2分の1の割合でというのを少し変えて、時期を区切って、割合もそれより少し下げて、政令市の方から提案したところ、県は理解を示したということで、知事は年始の会見で、浜松市が先になるんじゃないかとか、いろいろおっしゃっていて、その辺りについて開始の目途ですとか、県の対応についてはどのようにお考えですか。

【市長】

県も協力してくださっているというふうに理解しています。

【日本放送】

ありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。

それでは、お時間もございますので、本日の定例記者会見、以上で終了させていただきます。次回は、1月 22 日の火曜日、11 時からとなりますので、よろしくお願いいいたします。本日はありがとうございました。